

研究記録

身体と言葉の創造的行為を巡って ——インド／京都による国際共同研究

文：新里直之

本プロジェクトは、京都造形芸術大学〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉の活動の一環として、演出家シャンカル・ヴェンカテシュワラン氏をむかえて組織された国際共同研究である。日本におけるヴェンカテシュワラン氏の仕事としては、KYOTO EXPERIMENT（京都国際舞台芸術祭）の公式プログラムとして上演された『水の駅』（太田省吾作、京都芸術劇場 春秋座、2016年11月）の演出成果が記憶に新しい。今回の研究では、約一ヶ月にわたる同氏の日本滞在に臨んで、最新の演出作『犯罪部族法 Criminal Tribes Act』の上演、トークイベント、リサーチ、ワークショップなどを含む、複合的な研究プログラムを実施し、舞台芸術における「身体」と「言葉」のアクチュアルな創造性を多角的に検証することを試みた。

以下、プロジェクトの中心に位置するヴェンカテシュワラン氏のクリエイションに触れながら、研究会の様態を記していくことにしたい。

シャンカル・ヴェンカテシュワランと『犯罪部族法』

シャンカル・ヴェンカテシュワラン氏は、1979年生まれ、インド・ケーララ州出身の演出家である。カリカット演劇・美術大学卒業後、シンガポールのTTRP(Theatre Training & Research Program、演劇訓練および研究プログラム)を修了。2007年にデリーでシアター・ルーツ&ウィングスを設立し、近年はケーララ州のアタパディ地域を創作拠点としている。ケーララ州国際演劇祭では二年間、芸術監督をつとめ、インドとその周辺諸国の同時代性／社会性に重点をおくキュレーションを行った(2015・2016年)。ドイツのミュンヘン・フォルクス劇場のレパトリー作品の演出(2016・2017年)をはじめ、国際的な活動を数多く展開しており、さまざまな芸術交流を通じて日本の演劇人とも親しい関係を築いている(*)。

(*) 同氏の演劇的なキャリアについては、国際交流基金アジアセンターのウェブサイトに掲載されている、内野儀氏によるインタビュー「シャンカル・ヴェンカテシュワラン——インド・ケララから世界を眼差す」(<https://jfac.jp/culture/features/f-ah-sankar-venkateswaran/>) を参照。

このような演劇活動の歩みに色濃くあらわれている文化的多様性への感性を受けとめて、舞台芸術における創造的行為のあり方を見つめ直すことが本研究の根本課題であり、今回のヴェンカテシュワラン氏の来日に先立って、上演作品ならびに創造環境に関する了解を深めるべくプレ研究会が開かれた。

『犯罪部族法』は、英国植民地下のインドで施行された同名の法律（1871年制定、インド独立後に廃止）に着想をえた短編の演劇作品である。2017年にチューリッヒで初演され、ミュンヘン、ムンバイ、ゴア、バイルートで再演を重ねている。デリー出身で主に英語を話すルディ、コディハリ村出身で主にカンナダ語を話すチャンドラ。二人の男性のやりとりを通して、約150のコミュニティを「犯罪部族」と指定した、かつての差別的な法律の背後に広がるカースト制度や、現今の社会的差別の様相に光があてられる。

本作はチューリッヒで開催されたテアター・シュペクターケルの「ショート・ピースーズ」（短編特集）の参加作品として初演をむかえており、当初、ヨーロッパの国際演劇祭の観客を念頭において製作されている。プレ研究会では、内野儀氏の解説をたよりにそうした背景事情を考慮した上で、ヨーロッパ公演の上演資料（記録映像、テキスト）を検討した。この作品がレクチャー的な語りの特徴としながらも、一般的なレクチャーパフォーマンスに収斂しない自己言及的な批評性をもつこと（森山直人氏）。カンナダ語を英語に逐次通訳するというパフォーマンスの軸となる行為に、間主観的に主体が切り替わる契機が読みとれること（中島那奈子氏）などが指摘され、来るべき劇場体験のなかで、クリエーションの実質を慎重に見極める必要があることが確認された。

また東京大学大学院「多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）」の研修の際に撮影されたリハーサル映像の視聴により、アタパディの拠点劇場（Sahyande Theatre）の様子を窺うことができたことも、プレ研究会の大きな収穫だった。2010年より同地に移住したヴェンカテシュワラン氏らは、山の麓に位置するジャングルに道を切り開き、自らの手で鉄筋コンクリート造・半円形の劇場の建設に着手。その演劇活動は、先住民コミュニティとの協働や、農民入植者と渡り合う社会運動的な交渉などと並行して進められてきたという。グローバルな問題を視野におさめつつ、地域固有の問題に意欲的に身を投じていくその姿勢には、研究会参加者からとりわけ大きな関心が寄せられ、この演劇人の仕事の考察にとって、社会的な現実へ向かう意識と、演劇論的な思索との交点に迫ることが不可欠であることが改めて確認された。

『犯罪部族法』 来日公演

2019年1月、『犯罪部族法』は日本初演をむかえた（京都芸術劇場 studio21、東京都港区・リーブラホールを巡演）。すでに複数のレビューが発表されているが、舞台の装飾的な要素を切り詰め、俳優二人の声と身ぶりを中心に演劇のエッセンスを立ち上げていくこの作品が、日本の観客に深い共感と内省を呼び起こしたことを、重ねて強調しておきたい。

上演の冒頭部分、男が一人、テーブルやイスなどが僅かに置かれたフラットな舞台に登場し、きわめてゆるやかなテンポで、背をこごめたまま、柄の短い箒でくりかえし床を掃きつける。すると、それまで目につかなかった砂塵が寄せ集められて、可視なる存在として際立ってくる。この光景は、本作のいわば通奏低音を告げるものだといっている。ヴェンカテーシュワラン氏は「カーストについて語ることは暗闇の泥のなかで魚をつかまえるようなもの」と語っているが、舞台に底流していたものは、いま生きている世界に確かに存在していながらも見過ごされている把握困難な差別の問題を、いかに演劇的に汲み上げることが可能かという問いにほかならなかった。



『犯罪部族法』 京都公演 撮影：松見拓也

京都公演では、作品上演とあわせて演出者、出演者、日本の舞台芸術関係者による公開トークが行われた（第一回研究会）。アーティストサイドからは、まず作品のコンセプトとアクチュアルなテーマへ向かった経緯の説明があり、カーストの問題をめぐってリサーチを続けるうちに、他者の経験を自己の物語として語り直す行為のポリティクスに直面したこと。稽古のなかで、俳優の生活史的な背景や、各々の認識のギャップに注意を払って意見交換を進めたこと。また、カーストのもたらす暴力や排除にちなむ事例を取り上げるにあたって、権力構造から疎外された他者の痛みの「再刻印」を避けるべく試行錯誤を重ねたことが明かされた。

これに対して日本側の登壇者を交えた討議では、上演作品とそのコンテクストが縦横に議論された。作品の特質、クリエイションを支える演劇論的／社会的な姿勢、さらには創造環境のありようにまで視野を広げて、三浦基氏（演出家、地点代表）、あごうさとし氏（劇作家・演出家、アーツシード京都代表理事）との共通認識や演劇観の差異を浮かべながら展開したディスカッションは広範囲にわたった。「身体」「言葉」の創造性にダイレクトにかかわる内容としては、俳優の演技表現の検討を挙げておくべきだろう。カナダ語、英語、日本語（主に字幕）という多重の言語的屈折をはらんで提示されたレクチャー的な語りや、ロールプレイを織り交ぜた演技の様態。つまり本作における「演技者」「語り手」「人物」の三つの位相を行き交う身体演技は、カースト制度に強いられる「沈黙」（黙認される者の声、黙認する者の行為）を喚起すると同時に、コミュニケーションの齟齬や途絶をクリエイティブに読み替える地点から、言語と身体の可能性を切り拓いていたのである。



公演後のディスカッション

『犯罪部族法』は、初演では30分ほど、日本公演では50分ほどの作品に仕上がっている。再演の都度、上演空間や技術的な条件に配慮することはもとより、表現のアクセントを微調整し、ディテールを練り直す。そうした細やかな更新をとめない、同作の東京公演はシアターコモンズ'19のオープニングを飾っている。1月20日の公演後のシンポジウム「未来の祝祭、未来の劇場」では、ヴェンカテーシュワラン氏、安藤礼二氏（文芸批評家）、高山明氏（演出家、Port B主宰）により、演劇的な知や体験が共有される場の創出をめぐるビジョンが話し合われた。こちらの議論も興味深いものだったが、ここではヴェンカテーシュワラン氏がシアターコモンズの理念に共鳴し、登壇者各氏のさまざまな意見に耳を傾けながら、インドの社会状況やアタパディで進めている演劇活動を再考する手がかりを探っていたことを記録するにとどめた。

数々の対話

演劇創造に含まれるさまざまな対話の機会。それら一つ一つを深く発揮し、精彩に富む表現につなげていくという意味において、『犯罪部族法』は「対話の演劇」と呼んでいい作品だった。一方、ヴェンカテーシュワラン氏が、本プロジェクトに真摯に向き合い生み出していった数々の対話は、同氏の資質はもとより、演劇人としての方法的な態度を浮き彫りにしていたように思われる。公開研究会に続いて実施された研究プログラムは、ディスカッション型の研究会、日本の伝統芸能のワークショップ・リサーチ、関連企画の三つに大別される。プロジェクトに多様な視点とアプローチを確保することをねらいとして準備された各研究会の様子を、以下に併記しておこう。

【第二回研究会——ヴェンカテーシュワラン氏と日本の演劇人の対話#1】

関西を拠点に活動する二人の演劇人をむかえた対話では、『犯罪部族法』の創作プロセスが、筒井潤氏（演出家・劇作家、dracom リーダー）の演出的な関心に沿って掘り下げられた。これにより同作の参照項（ベル・フックスのエッセー、インドの政治社会史の事跡など）や、表現が固まる以前の紆余曲折の過程が詳らかになった。また、ともに現在進行中の劇場創設プロジェクトに携わっているヴェンカテーシュワラン氏、あごうさとし氏により、地域コミュニティとクリエーションとの相互作用に関する意見が交わされ、劇場文化の観点から研究を見直す手がかりがもたらされた。



於：京都芸術劇場 楽屋

【第三回研究会——ヴェンカテーシュワラン氏と日本の演劇人の対話#2】

これまでヴェンカテーシュワラン氏と共同で芸術交流活動を積み重ねてきた安藤朋子氏（アクター、シアターカンパニーARICA）、藤田康城氏（演出家、同前）を招いた対話では、アタパディやインド各地で実施された演技訓練、ワークショップ、研修などの協働作業を振り返りつつ、声やムーブメントの発現する契機、さらにはそれ以前の言語・身体の状態をつぶさに検証していく手続きが話し合われた。また、劇場を「as if の空間」（あたかも～であるかのような世界を見せる場）と捉え、ポストドラマの流れをおさえながらも、フィクショナルな演劇世界を志向する、ヴェンカテーシュワラン氏の創作スタンスの状況に対する位置が再確認された。



於：SCOOL（東京、三鷹）

【第四回研究会——能楽ワークショップ】

ヴェンカテーシュワラン氏は、自身の劇団を設立する前に、シンガポールの TTRP に在籍し、現代演劇およびアジア各地の伝統演劇の実践プログラムに参加している。今回の能楽ワークショップは、同氏がかつて TTRP の課程で指導を受けた観世喜正氏（観世流シテ方能楽師）のもとで謡と仕舞の稽古に取り組み、能楽の技法と表現構造について実践的思考を深める機会となった。



於：矢来能楽堂（東京）

【第五回研究会——壬生狂言リサーチ】

リサーチの対象は、毎年 2 月、壬生寺節分会の折に公開される壬生狂言（演目『節分』）である。七〇〇年ほどの歴史をもち独自の発展を遂げてきた滑稽味のある仮面無言劇の上演とその舞台裏を見学。あわせて地域の人びとの手で伝承されてきたこの民俗文化財の実情について、壬生大念仏講員の八木聖弥氏より説明を受けた。



於：壬生寺（京都）

【関連企画 1——『犯罪部族法』ポスト・パフォーマンス・ワークショップ】

『犯罪部族法』東京公演の初日（1 月 19 日）には、来場者に参加を募り、演出家・俳優がファシリテーターをつとめるディベート型のワークショップが開かれた。100 名近くの参加者全員で、テキスト（ある種の倫理的ジレンマが刻まれた物語）を共有し、各々がその読解にもとづき、互いに相反する二つの立場、もしくはそれを審判する立場のいずれかを選び、議論ないし討論をする。観客を演劇に不可欠な共同製作者と見なす演出家にとっても、これは初めての試みだった。

【関連企画 2——ジャンカル・ヴェンカテーシュワラン×山田せつ子「身体対話」】

一方、東京大学大学院の公開授業として催された公開ワークショップでは、ヴェンカテーシュワラン氏の朗読に、山田せつ子氏のダンス（インプロビゼーション）が対峙する実験的なセッションが行われた。マラヤーラム語の詩篇（Sahyante Makan）の朗読が三度くりかえされる合間に、その内容が段階的にダンサーと来場者に開示される。「意味」の共有域の変動する条件のもと、発語する身体と踊る身体との共振関係が差し出され、その繊細な知覚の対話に、来場者を交えた質疑応答が続くのである。

未来の対話に向けて

本プロジェクトは、いわゆる主知主義的な「理解」ととどまることなく、身体と言語にまつわる実践の「知」に迫るといふ要請にしたがい、柔軟性をもつ研究プログラムから構成されていた。それら一つ一つを実施してみるまでは、研究の現場で何が生じるのか、予測しがたい部分もあったが、幸いにして、多くの協力者・協力団体に助けられ、また公開企画の来場者にも恵まれ、いずれの研究会も実り多いものとなった。とりわけ具体的なクリエイションに焦点を合わせて、創造現場との緊密な結びつきのもとで、演技表現のアクチュアルな可能性に関する議論を蓄積できたことは大きな収穫だったといえるだろう。その一方で、クリエイションの歴史的・文化的背景の理解をさらに時間をかけて深めるとともに、研究成果をより広い文脈のなかで熟考していくべきであることも確認された。

プロジェクトの発足当初、研究代表者の山田せつ子氏は、次のように問いかけていた。舞台芸術の生成過程には、さまざまなレベルで、形式化・硬直化した制度や規範の枠組みとの葛藤が潜在するが、ヴェンカテーシュワラン氏は、そうした多重の枠組みをいかに捉え、いかにそれを乗り越えようとしているのか――。

見えない制度・規範として、いまなお事実上の慣行に働きかけ続けているカースト。あるいは、つねに／すでに、人びとがそこに寄り添い加担することを待ちうけている「制度としての社会」「制度としての芸術」。それらにできるかぎり自覚的に対処しながら、ただちに解消しえない問題から目をそらすことなく対話を続けること。これは今回のクリエイションばかりではなく、舞台芸術に携わる人びとに広く共有されるべき姿勢であるに違いない。

ヴェンカテーシュワラン氏は、演劇のもつ根源的な力に信頼を寄せ、社会的な現実謙虚に向き合い創作活動を継続させている。演劇は新たな世界のイマジネーションを観客と共有するための言語であり、行為する身体とそれを見つめる身体との間に存在する。演劇は生きるための方法を見出すクリエイティブなアプローチである――。このような基底認識を、表現の倫理として張りつめて背負い、さまざまな演劇実験に昇華させていく同氏の試みについては、引き続き注意を向けていく必要がある。本プロジェクトの成果を未来の対話につなげていくことが、今後の課題となってくるだろう。

新里直之（にいさと・なおよき）近畿大学大学院総合文化研究科修士課程修了。京都造形芸術大学大学院芸術研究科博士課程在籍。論文に「問いかけを結ぶ環――研究プロジェクト「太田省吾を〈読む〉――未来の上演のために」」（『舞台芸術』21号、2018年3月、角川学芸出版）など。ブログ「劇評 18/19+」（<https://criticism1819.hatenablog.com>）に舞台芸術に関する短評を掲載。

研究プロジェクトデータ

京都造形芸術大学〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉

2018年度共同研究プロジェクト（研究代表者 山田せつ子）

テーマ研究

身体と言葉の創造的行為を巡って——インド／京都による国際共同研究

共催：公益財団法人セゾン文化財団 平成30年度文化庁「アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」（シャンカル・ヴェンカテシュワラン氏 2019年1月9日～2月5日 来日全日程に対して）

協力：シアターコモンズ実行委員会（シアターコモンズ'19、1/19・20『犯罪部族法』東京公演主催）

【研究期間】

2018年9月8日 プレ研究会

2019年1月13・14日 第一回公開研究会（『犯罪部族法』上演、公開トーク）

1月15日 第二回研究会（ヴェンカテシュワラン氏と日本の演劇人の対話#1、非公開）

1月23日 第三回研究会（ヴェンカテシュワラン氏と日本の演劇人の対話#2、非公開）

1月21・24・25日 第四回研究会（能楽ワークショップ、非公開）

2月2日 第五回研究会（壬生狂言リサーチ、非公開）

【研究組織】

研究代表者：

山田せつ子（ダンサー／コレオグラファー／京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員）

共同研究者：

シャンカル・ヴェンカテシュワラン（演出家／シアター・ルーツ&ウィングス主宰）

森山直人（演劇批評家／京都造形芸術大学舞台芸術学科教授／同大学舞台芸術研究センター主任研究員）

研究協力者：

内野儀（パフォーマンス研究／演劇批評／学習院女子大学教授）

鶴留聡子（シアター・ルーツ&ウィングス制作）

内藤久義（日本中世芸能史／東京大学）

中島那奈子（ダンス研究／ダンスドラマトウルク）

新里直之（演劇研究／演劇批評／京都造形芸術大学大学院芸術研究科博士課程）

原口佳子（舞台監督）

川原美保（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター）

竹宮華美（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター）

※ 肩書きは2018年度に統一した。

【『犯罪部族法』上演クレジット】

演出＝シャンカル・ヴェンカテシュワラン、出演＝チャンドラ・ニーナサム、アニルドゥ・ナーヤル、制作・字幕翻訳・字幕オペレーション＝鶴留聡子、製作＝シアター・ルーツ&ウイングス、作品初演＝チューリッヒ、2017年

◆京都公演／2019年1月13・14日 京都芸術劇場 studio21（京都造形芸術大学内）

舞台監督＝大田和司、照明＝葛西健一、音響＝奥村朋代、通訳＝鈴木雅恵、主催＝京都造形芸術大学〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉

公開トーク：登壇者＝シャンカル・ヴェンカテシュワラン、三浦基（13日）、森山直人（13日）、あごうさとし（14日）、内野儀（14日）、チャンドラ・ニーナサム（14日）、アニルドゥ・ナーヤル（14日）、山田せつ子（モデレーター）

◆東京公演／1月19・20日 リーブラホール（港区立男女平等参画センターリーブラ）

舞台監督＝ラング・クレイグヒル、照明＝山下恵美（RYU. Inc）、帆足ありあ（RYU. Inc）、大庭圭二（RYU. Inc）、音響＝稲荷森健、映像協力＝石塚俊、舞台協力＝株式会社ステージワーク URAK、通訳＝田村かのこ（Arts Translators Collective）、山田カイル（抗原劇場）、会場協力＝港区、主催＝シアターcommons実行委員会

ポスト・パフォーマンス・ワークショップ（19日）：ファシリテーター＝シャンカル・ヴェンカテシュワラン、チャンドラ・ニーナサム、アニルドゥ・ナーヤル

シアターcommons '19 オープニング・シンポジウム（20日）：登壇者＝シャンカル・ヴェンカテシュワラン、安藤礼二、高山明

【関連企画】

シャンカル・ヴェンカテシュワラン×山田せつ子「身体対話」（公開ワークショップ）

2019年1月26日、東京大学駒場キャンパス コミュニケーションプラザ2階 舞台芸術実習室

主催＝東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）」教育プロジェクトH「生命のポイエシスと多文化共生のプラクシス」、協力＝公益財団セゾン文化財団、京都造形芸術大学〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉